

# 瀬田貞二の再話による絵本の「ことば」と『児童百科事典』の背景

町 田 り ん

## はじめに

瀬田貞二<sup>(1)</sup>は、瀬田が『児童百科事典』編集を開始した1949年から1979年の逝去までの30年間、戦後日本の子どもの本の黎明期を支えた。没後25年経過した現在も再版を重ねる多くの絵本および児童文学の再話と翻訳を手がけ、その文体は「瀬田節」といわれるほど特徴がある。

本論では瀬田貞二の再話絵本について、瀬田の再話の背景を探り、子どもがはじめて出会う本である絵本の「ことば」について考察した。そしてさらに瀬田の仕事の土台をなす『児童百科事典』誕生の経緯と内容のコンセプトをひもとき、瀬田の仕事、子どもの本の現状に照らして再考した。

なお『児童百科事典』全巻は盛岡大学図書館が所蔵。岩手県下では本校のみの所蔵であるが、ちなみに東京都でも二カ所の図書館でしか見ることはできない貴重な文献である。

## 1 絵本のことば

### (1) リズムのあることば

裏付けとしての日本とイギリスの童唄研究

瀬田は『幼い子の文学』のなかで、柳田国男<sup>(2)</sup>について次のように述べている。「子どもの成長と言葉の成長を関連させて捉えようとする意識は、柳田さんに濃厚にあったと思う。そして柳田さんは、そうした言葉の成長を全部言語技術と呼んで考えていたようですが、そこに出てくるような、若干の節付けがあつてうたいあげのような言語というのは、やはり広い意味で童

唄ではないかと、私は思うのです。」<sup>(3)</sup>

また、町田喜章『わらべうた―日本の伝承童謡―』<sup>(4)</sup>のなかでの「わらべうた」の選定基準は、「子ども同士の集団生活から自然発生的に生まれてた唄で、それが長い年月の間に洗練され、淘汰され、今日まで伝承されたもの。発生の年代も、作詞・作曲者も明らかではないが、すべて美しい曲節を遺存し、現在、わらべうたとして比較的、分布圏の広いもの。」となっている。しかし瀬田はそこからさらに広く「節(リズム)のついた言葉」までも「わらべうた」の収集に織り込み、柳田の言う「言語技術」のなかでとらえるのが良いのではないかと主張する。

すでにイギリス童謡研究書、オビー夫妻による『オクスフォード童謡事典』<sup>(5)</sup>では、町田の選定基準に収まらない「日常のちょっとした言い習しのような断片的な言葉」も収集され事典に掲載されている。瀬田は「それが、詩としてこちらに訴えかけてくるものであれば、当然それは童唄の系列に連なるものとして考える事ができる」とし、「私などは、ぜひその方向で見たいと思っています。」と述べている。

瀬田は、具体的には「いちばんぼーし、みつけた」「かえるがなくから、かえろ」といった、リズムに乗って定型化された言葉も「童唄」として、子どもの言葉の世界で重要な役目を担っていると考えた。

以下に瀬田の翻訳絵本『おだんごばん』<sup>(6)</sup>『三びきのやぎのがらがらどん』<sup>(7)</sup>『三びきのこぶた』<sup>(8)</sup>の「ことば」の一部を抜き出し、それらが節回しが感じられるように工夫された再話であることを確認する。瀬田は、幼い子どもたちが最初に出会う絵本に、意図的に「リズムのあることば」を使うことを試みていたのではないか。

### 『おだんごばん』

ほくは、 てんかの おだんごばん。  
ほくは、 こなばこ ごしごし かいて、 あ  
つめて とって、  
それに、 クリーム たっぷり まぜて、 バ  
ターで やいて、  
それから、 まどで ひやされた。…

### 『三びきのやぎのがらがらどん』

がたん、 ごとん、 がたん、 ごとん、 と、  
はしが になりました。…「いったいぜんたい  
なものだ、 おれのはしを がたびしさせる  
やつは」…  
「おれだ！ おおきいやぎの がらがらどん  
だ！」…  
「ようし それでは ひとのみにしてくれる  
ぞ！」  
「さあこい！ こっちにゃ 二ほんの やりが  
ある。  
これで めだまは でんがくざし。  
おまけに おおきな いしも 二つ ある。  
にくも ほねも こなごなに ふみくたく  
ぞ！」

### 『三びきのこぶた』

「こぶた、こぶた、おれを いれとくれ」  
「だめ、だめ、だめ、めっそうもない」  
「せいじゃ、ひとつ、ふうふうの ふうで  
この いえ、ふきとばしちまうぞ」

これらは容易に節をつけることができ、リズムを損なわないように注意深く編まれている。瀬田は童唄を、柳田国男やオピー夫妻のように、柳田の言葉を借りれば子どもの言語技術のなかで捉えながら、その同一線上に絵本の「ことば」も、広い意味での童唄の領域に乗せる工夫を凝らしていたのではないか。

#### (2) マジックアンドミュージック

さらに瀬田は『幼い子の文学』のなかで、ハーバート・リードの言葉「マジック・アンド・

ミュージック」を引用し、「ある言葉は耳に快く響きますし、ある言葉は魔力を持ち心を神秘感(ワンダー)で満たします。マジックとミュージック、これが最良の詩には具わって、いっしょになって、特別な喜びを私たちに授けてくれます。」<sup>(9)</sup>と述べている。

坊やはよい子だ ねんねしな この子の可愛さ  
限りなさ  
天にのぼれば 星の数 七里ヶ浜では 砂の数  
山では 木の数 かやの数  
沼津に下れば 千本松 千本松原 小松原  
松葉の数より まだ可愛い ねんねんおころり  
おころりよ  
(沼津の子守歌)<sup>(10)</sup>

沼津地方の子守唄を例に瀬田は「マジック・アンド・ミュージック」について、「①言葉が尻取りのように続いていくそのうまさ。②リリカルなイメージ、音の響きがとても良い。」以上二点を掲げる。すなわちマジックは「魔力があって気持ちを引きつける」こと、ミュージックは「響きがいい、耳に聴いていて気持ちがいい」これが童唄をはじめとする「子どものための詩」の必要不可欠な要素であるというのだ。

瀬田の再話から「マジック・アンド・ミュージック」の好例として『ちっちゃな ちっちゃな ものがたり』を取り上げてみる。

### 『ちっちゃな ちっちゃな ものがたり』<sup>(11)</sup>

むかし ちっちゃな ちっちゃな むらに  
ちっちゃな ちっちゃな うちが あって  
ちっちゃな ちっちゃな おばさんが ひとり  
すんで おりました。  
さて あるひ  
ちっちゃな ちっちゃな おばさんが  
ちっちゃな ちっちゃな ぼうしを かぶり  
ちっちゃな ちっちゃな うちをでて  
ちよっぴり ちよっぴり さんぼしました。

この昔話は、ちっちゃな村のちっちゃな家のちっちゃなおばあさん…と繰り返す。言葉はマ

トリューシカ人形のように、イメージを喚起し、物語の中へ中へと聞き手を引きつけて行くマジックがある。

さらにその言葉の響きを最大限に生かすための仕掛けがほどこされている。「ちっちゃん ちっちゃん」の繰り返しから、「ちよっぴり ちよっぴり」への、ささやかな変化。「さて あるひ」といった展開の予感。そして「ちっちゃん ちっちゃん」というリズムの再現が言葉のリズムを整え、音楽でいえば低弦楽器的に、子どもの心に安心感のある響きとなって届いていく。そこには考え抜かれた瀬田の心配りがある。

### (3) 絵本のことば

次に瀬田の翻訳による、マーガレット・ワイズ・ブラウン作『おやすみなさい おつきさま』をとりあげ、絵本のなかのことばの表現と絵の関係についての瀬田の考えを考察する。

#### 『おやすみなさい おつきさま』<sup>(12)</sup>

おおきな、みどりのおへやのなかに  
でんわが ひとつ  
あかい ふうせんが ひとつ  
えの がくがふたつ…  
それは めうしが おつきさまを とびこす  
えと  
さんびきのくまが いすにこしかけてる え  
こねこが にひき てぶくろが ひとそろい  
にんぎょうのいえ  
こねずみ いっぴき  
くしと ブラシ  
おかゆが ひとつわん  
うさぎのおばあさん ちいさいこえて  
しずかにおし といっています

- おやすみ おへや
- おやすみ おつきさま
- おやすみ おつきさまをとびこしてるうしさん

……

瀬田は『絵本論』<sup>(13)</sup>のなかで、より小さい人たちのための絵本の誕生の代表格にこの作者を掲げ、ワイズ・ブラウンの絵本の言葉の特徴を次のように述べている。

- ①ごく幼い子に語りかける。
- ②ひびきある、やさしい韻文でいう。
- ③しぼられたテーマを、リズムで運ぶ。
- ④具体的で、感覚的でイメージをさそう。
- ⑤多くは読者の共感をさそう小さなことをつんでいく。
- ⑥絵をできるだけ働かせて、キャプションは静かで控えめで、伴奏的になる。

瀬田による、このワイズ・ブラウンの絵本の特徴の分析は、現在の「絵が物語る絵本」の隆盛を予感させて余りある。しかし瀬田は『おやすみなさい おつきさま』は「大好きな絵本の一冊」とした上で、この絵本の文について、この文は絵に従属した、座付き役者のような、よく透る静かな小さな声、「水底の岩に落着く木の葉かな」のような良さがある反面、絵の方が強烈に作用して、文の働きがなくなり、意味の印象が無くなる場合があることを指摘する。<sup>(14)</sup>

「文は、ほとんど文とよべる箇所はなく、はじめに「おおきな みどりのおへやのなかに一」とあり、電話、赤い風船、額の絵…と個々の品物と調度と、生きているものたちを、単語、複文章のついたものの名前だけをあげつらねて、中頃からそれに「おやすみ」をかぶせて、「おやすみ あかりさん。おやすみ あかいふうせん…」のようになる。それは眠たげなひとりごとである。ただし色刷りの見開きの部屋の中は、しだいにあちこちの明かりが減って、生きものたちがしかるべきところにおさまり、かくれ、去って行く。絵が、ゆっくり繰り返しで微妙な変化を示していくのである。…小さな読者は調子のいい単調な単語の配列で、ものをよく見る事を学ぶ。そして変化に気づく。…それは発見といえるほどの作用をもたらす。…それを文章はまったく知らせはしない。絵がさりげなく示すだけだから、子どもたちが「発見」するのである。…子どもたちは、字をはなれて絵を記憶する。」

これに対して、おなじワイズ・ブラウンの『クリスマス・イブ』<sup>(15)</sup>は、画家の優れた絵と、ワイズ・ブラウンの詩が相互に良くつりあって美しく、これが、幼い人たちに語り、画家にイメージを誘い、絵本の発想を開く、専業作家の誕生と性格であるという。

翻って協明子は、本を読むということについて、大切なのは一文字一文字読む事ではなく、言葉をもとに想像力を働かせ、内容を理解し、物語の展開について行くことだと述べている。<sup>(16)</sup>子どもの、言語の習得の過程の中で、文字を解読しイメージを構築する作業にはそれ相当の訓練が必要だと協は述べ、その力を「読む力」として重要視する。

絵本のことばが、それが幼い子どもに向けられたことばであっても、単に文字の展開というのではなく、そこに幼い子どもに向け「語る」という要素があること、ことばが画家のイメージを誘っている事の大切さを瀬田は主張する。すなわち協のいうように、その先にはことばによってのみ想像力を働かせる「読書」という膨大な地平がある事の、前提としての絵本の存在価値を逸脱してはならないと柔らかく示唆しているのである。

## 2 『児童百科事典』再考

### (1) ユーモアの中に込められた教育的視点

『児童百科事典』の仕事をとおして

1956（昭和31）年に瀬田が編集長を務め、平凡社から上梓した『児童百科事典』（全25巻）は、その後の瀬田の仕事の礎となる大きな仕事だった。瀬田を編集長に推した日高六郎は、瀬田の仕事について「瀬田貞二君の思い出」のなかで次のように述べている。

「彼は『児童百科事典』で、大変な力量を発揮した。私は、いまでもこの事典は高い水準の仕事だと思っている。瀬田君は、企画編集だけではなく、執筆とリライトでたいへんな分量の仕事をごなした。

…

彼の文章の簡潔さ、短い表現のなかに本質的なことがらをおさえるたくみさ、そして歴史的な位置づけのあざやかさなど、目を見はるものがあった。

この『児童百科事典』の仕事をする中で、彼は数多くの人々に彼の真価をみとめさせたと思う。」<sup>(17)</sup>

さらに瀬田のもとでこの本の図版を担当した松森務は編集長としての瀬田の仕事を「『児童百科事典』の頃」のなかで詳しく述べている。「瀬田さんの構想は役に立つだけでなく「楽しい事典」を作ることだった。偶然めくったページに思わず読みふけってしまうような、宿題をこなすために、いやいや引いた項目から、その文章や挿絵に好奇心をそそられて、志を呼びおこされるような、そんな事典が作りたい、ということだった。…次代を担う生徒や学生に、筋の通った生きた学問の楽しみを知ってもらいたい、と瀬田さんは熱情をこめて下中局長に語った。

やがて瀬田さんを編集長として部員が集められた。項目選定には日高氏を始め、林達夫、国分一太郎など多くの人が参加して検討され、原稿依頼が始まった。

その「執筆依頼状」にはそうした瀬田さんの理想が熱意をこめて書かれ、「児童のイマジネーションをかき立てるような文章で正確な内容を伝えるように」と、執筆者に要請された。

しかし、瀬田さんの意向に合った原稿を期待することは難しかった。瀬田さんは全面的な原稿のリライトを決断した。

このリライトで瀬田さんが試みた特徴的なものの一つに、全ての項目に導入部をつける、というのがあった。「思わず引き入れられるようなイントロ」を書くこと、これが編集部で課せられた最初の命題だった。

原稿のリライトに編集部の人たちはよく旅館に泊まりこんだ。瀬田さんは全ての原稿を読み、気に入らない所は何度でも書き直させた。当時の編集部員は皆若かったが、皆優れた素質を持つライターだった。また、瀬田さんの指導によって優れたライターになった。後年、学者、

著述家として一家をなす谷川健一、市場康男らも、この「瀬田教室」のメンバーだった。」<sup>(18)</sup>

『児童百科事典』の「まえがき」の中で瀬田は次のように述べている。

「児童百科事典は、やさしい話から知識へ、身近な事から深い道理へ、応用から原理へ、読むことから考えることへの、かけ橋でなければならない。…児童は可能性である。…この辞典は「学問の正確さと、視野の広さとを保つこと」「問題をいきいきと、まざまざと表すこと」「しかも、直接中心をついて簡明であること」を、あくまでもめざした。」<sup>(19)</sup>

ここで瀬田の執筆による「カッパ 河童」の項目を見てみよう。

「河童がほんとうにいるかどうか。だれもみたものはない。いや、村の太郎は、ゆうがた1人で川へ行って、おしりに吸い付かれて、おぼれて死んだ。たしかに河童が、あの頭の皿で吸いついたのだ。ところが、次郎の家では、知らないまに河童が畑の手つだいをして、おかげでしごとがはやくすんだ。すると、おじいさんが語りだす。むかしむかし、岩手県の遠野の町にちかい小鳥瀬川の姥子淵のほとりに、1けんの農家があった。ある日、そこのこどもが淵に馬をひやしにいったが、あそびに夢中になって、馬をそこへおいたまま、どこかへ行ってしまった。そのすきに河童があらわれて、馬を淵に引きこもうとした。ところが、あべこべに馬に引きずられて、うちの庭までつれてこられた。こまった河童は、うまやのまえにあった馬ふね(まぐさ桶)をふせて、そのしたにかくれたが、ふしぎにおもった家のものが、馬ふねをすこしあけたので、水かきのついた手がでて、たちまちつかまってしまった。あつまった村の人たちは、殺そうか助けようかと、いろいろ相談したが、河童は、これからはけって村にいたずらしないと、かたい約束をしてゆるされた。…」

ここまでがイントロであろう。例えていえば、ユーモアと教養のある伯父が、甥や姪におもしろおかしく話しているような印象である。続けてみよう。導入部を経ていよいよ本文になるのだが、本文も堅苦しいものではない。

「河童のはなしは日本中どこでもきくから、河童はたしかにいるらしい。では、どんなすがたをしているかということ、それは地方によってまちまちだ。オカッパあたまに皿をのせ、とんがった顔をして、手に水かきをもっているのがふつうだが、からだの色は、西の諸国では緑色だというし、東北では赤ともいう。カメレオンのようかわるともいう。そうかとおもうと、中国、四国などには、エンコウとよんでサルにたものだという土地もあるし、また地方によっては、カメ、スッポン、カワウソのなかまだと考えている。…」

本文はまだまだ続く。芥川龍之介『河童』の話、日本の山里の人たちだけが知っている土地の話、淵猿と河童の係わり、水神信仰との関係から桃太郎、瓜子姫伝説の話、水と馬にまつわる言い伝えと駒引猿の信仰などをつぎつぎと紹介して、以下の文でしめくくっている。

「さて、ふるいむかしから、日本の山里の川や沼にすんできた水神の童子カワコゾウは、あんまりいたずらがすぎたせいか、すっかりおちおぼれて、いまは絵にみるような、あんな奇怪なすがたになってしまった。それでも、天真らんまんなこどもたちや、心の清いおとなたちは、‘カッパ、カッパ’と、ますます親しみをよせている。かわいいオカッパあたまは、小さい男の子や女の子がみんなする。でも、だれも河童をみたものがないから、やっぱり、ほんとうはいないんだらうって。いやいや、日本の山里の素朴な民俗が水のなかから発見して、ながいこといつくしみ、そだててきた河童は、いまでもちゃんと川や沼にすんでいる。」<sup>(20)</sup>

さらに「カッパ」の項目の次の「カツラ」の導入部はこうだ。

「カツラの木は、むかしから月の中にあるといわれた。月の表面のかげもようがそういう伝説をうんだらしい。中国のふるい本に‘月の中のカツラの木は高さが1500 mで、その下に1人の男がおり、いつもこの木をきっている。……また万葉集にもそういう伝説をもとにしたうたがある。……」

瀬田が各項目のリライトで試みた特徴的な

ものに、「思わず引き入れられるようなイントロ」を書くこと、これが最初の命題だったというが、上記の項目の導入部も「思わず引き入れられるようなイントロ」にリライトされている事が伺える。さらに締めくくりの文章は話し言葉に近く、いきいきとした「瀬田節」がすでに文章に現れている。「カッパ」に続く「カツラ」のイントロもおもしろい。これは中国の伝説からの引用で、「カッパ」を読み終わった子どもが、思わず次の「カツラ」も読み進んでしまうのではないか。そしてそれこそ瀬田の編集の狙いだったのではないか。

『落穂ひろい』<sup>(21)</sup>の序文のなかで瀬田は「子どもの情感、子どもの生活をこまやかに見て、その喜びを喜びとしたような人々の系列、ケストナーの口ぶりを借りていえば、詩人と庭師しか持てないような方法で子どもたちとつきあった者の歴史の方へ、私は近づきたいのです。」と述べている。『児童百科事典』の楽しい語り口のなかで瀬田の目指していた方向は、「詩人と庭師」しか持てないような方法でリベラルアーツ的教養を子どもに伝えるための、細やかな配慮にあふれた試みだった。

## (2) 精神的背景

次に瀬田がこの仕事をどのような経緯で行うことになったかについて瀬田自身の文章が、斎藤惇夫によるとただ一つ、残されている。

「…昭和二十年八月十五日に、私は、東京から川一つ隔てた土地の陸軍病院に衛生兵としてかりだされていた。……終戦そのことは、来るものが来たという感じだった。…日本はこれからどうなるか？…私は、はっきり決心した。夜間中学の教師だった私は、一応職場に帰るだろう。しかし、…私は自らのあらゆる能力と時間を、子どもたちにむかって解放しなくてはならない。これからの時代は、子どもたちに期待するよりないのだから…私は真剣にそう思った。…東京へ帰って…焼けた残骸の校舎の裏で一、二のクラスを作って、やたらにがり版を切る。軍服教師の私製教科書は、かなり生徒に気

に入られた。……一年半…学校へ通勤し続けられたが、二十三年四月の新制高校への切りかえの時に転機を迫られた。新しい制度の新しい教科書が、てひどくアメリカの干渉になった、制約の多い、程度の低い内容になりそうな形成を私は見た。教師をやめるべきである。兵営で考えぬいたとおりに広く精神的にどこかで働くべきである。教育は下の方からでもできる。…そして私は教師をやめた。失職すると、ものを書く勇気を出した。そのころ開かれた赤坂離宮の国会図書館へ通って、豪華なシャンデリアの下で、せつせとアメリカの子どもむき百科事典を読んだ。学力の低下は必至だが、民間から子どもの百科事典のすばらしいものを出して、そいつをくいとめることができなだろうか、そう私は思っプランを立てた。社会科事典を出していた平凡社が私のプランをいれ、二十四年の夏に、私は、「児童百科事典」の編集にとりかかった。その仕事は八年間かかった。私はその間に子どもの本を、おもに外国の作品を読んだ。」<sup>(22)</sup>

この文章からは、自ら戦後復興の課題を子どもの本に定めた、瀬田の決意を読みとることができる。

またこの時期、日本の子どもの本の世界では石井桃子や瀬田を中心的な存在としながら以下のような書籍の創刊や研究会の発足が相次いだ。

1950年12月25日「岩波少年文庫」創刊 石井桃子、いぬいとみこ他

1951年『児童百科事典』創刊（平凡社）瀬田貞二、日高六郎、林達夫他

1953年「岩波の子どもの本」創刊 石井桃子他

1955年「子どもの本研究会」石井桃子、いぬいとみこ、鈴木晋一、瀬田貞二、松居直、渡辺茂男

1956年「月刊 こどものとも」創刊（福音館書店）

## 3 結論

本論では瀬田の膨大な仕事の中から数冊の絵本とそのことばの関連、そして瀬田が三十代の八年間を費やして取り組んだ『児童百科事典』

の仕事の背景を考察した。

現在の子どもの本の出版状況は絵本が主流であり、絵本以外の幼年童話に始まる児童書の出版は衰退の状況にある。そのことについての問題意識はすでにたびたび論じられてきた。

本論でとりあげた瀬田の、絵本のことばにこめる真摯な試みについて、筆者はそれが現代に投げかける意味を見逃してはならないと考えた。むなしいことが嫌いだっただという瀬田は、子どもの文学についてたゆまぬ研究を続けていたにも拘わらず、その成果を全て、実際の絵本や児童書のことばにして現実に生きる子どもたちに手渡してきた。瀬田は時間が惜しかったのである。

『児童百科事典』が本校図書館の所蔵であり、瀬田の仕事の水脈を掘りすすめる事ができたことは非常に幸いであった。

(1) 瀬田貞二は1916(大正4)年に東京下町本郷切り通し坂町(現湯島一丁目)に生まれた。東京帝国大学文学部国文科で俳人中村草田男に師事。夜間中学教諭を経て1949年平凡社入社『児童百科事典』全24巻を編集責任者として上梓した後、数多くの子どもの本の執筆、翻訳、評論を手がけた。主な翻訳に『ナルニア国物語』『指輪物語』『三びきのやぎのらがらどん』などがある。

(2) 柳田国男は『遠野物語』の作者として岩手県には縁の深い作家である。子どもの言葉の成長を言語技術としてとらえていた『分類児童語彙』における柳田の説を瀬田は高く評価した。

以下民俗学者柳田国男のたどった生涯についての松岡正剛の一文が興味深い。抜粋して掲載する。

明治8年に兵庫県神東郡田原村辻川に松岡家の6番目の子に生まれた。父は医者で儒者だったが、宣長や篤胤の国学に熱心だった。11歳で三木家に1年間預けられ、そこで和漢の書に出会った。この年、「日本で最後の飢饉」が近村を襲った。この目撃は決定的だったようで、その後に柳田は開成中学・一高・東大に進むのだが、学校でとりくんだのは三倉(義倉・社会・常平倉)の研究だった。柳田はこのことが自分を民俗学に向かわせた動機だったと書いている。

大学を出て農商務省に入り、農業政策にとりくんだ。わずか2年の活動だったが、講演をもとに書きおこした『時代ト農政』が当時の農政学水準を抜き

ん出た。

柳田の農業への関心はつづいて土俗学へ、さらには郷土学へ、そうして民俗学になっていく。そしてそれが、結局は水田灌漑を分類してみせた『海上の道』につながった。

その後の柳田は明治42年に椎葉や遠野を訪れ、民間習俗というものの採集の方法にめざめると、一挙に郷土調査に向かっていく。柳田は昭和前期を通して、のちに「重出立証法」という採集と表現を組み立てる方法を確立していく。それが柳田民俗学である。柳田の民俗学は思想の言葉をもたなかった。見聞をしたことを記載することが柳田の方法で、それを聞き書きというなら、まったくそれ以上でもそれ以下でもなかった。

鏡石佐々木喜善からの聞き書きの『遠野物語』がそのようにして一冊になった。思想の言葉をもたなかったからといって、思想がないわけではない。独自に歩んでそれが「学」になっていった。

その思想をしないで民俗学(フォークロア)とよぶようになったとしても、それが柳田学とよばれるようになったとしても、柳田の土俗や農民や海民に目を凝らし耳を澄ますという態度と気持ちは、たいして変わらなかったのではないか。柳田の『故郷七十年』にはこんなふうにあった、「ヒストリーを望むにはエスノグラフィーの樹陰がよく、しかもその森の中にただ一筋の小路をたどらなければ、フォークロアの我家にはかえてこられぬ」(松岡正剛の千夜千冊より)

瀬田がたびたび柳田を引用する背景が上記の松岡の一文から感じとれないだろうか。柳田は足で歩き見聞を記載した。瀬田もまたむなしいことを嫌った。

- (3) 瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論社、1980年、59頁
- (4) 町田嘉章・浅野健二『わらべうた』岩波書店、1983年、3頁
- (5) 瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論社、1980年、60頁  
“The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes” Iron and Peter Opie Oxford University Press 1951
- (6) ロシア民話『おだんごばん』脇田和絵 瀬田貞二訳 福音館書店、1966年
- (7) 北欧民話『三びきのやぎのらがらどん』マーシャ・ブラウン絵 瀬田貞二訳 福音館書店、1965年
- (8) イギリス民話『三びきのこぶた』山田三郎絵 瀬田貞二訳 福音館書店、1967年
- (9) 瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論社、1980年、61頁
- (10) 町田嘉章『わらべうた』岩波書店、1983年、100

頁

- (11) 『ちっちゃな ちっちゃな ものがたり ジェイコブスのイギリス昔話集より』 瀬田貞二訳 瀬川康男絵 福音館書店、1995年
- (12) マーガレット・ワイズブラウン『おやすみなさいおつきさま』クレメント・ハート絵 瀬田貞二訳 評論社 1979年
- (13) 瀬田貞二『絵本論』福音館書店、1985年、367～368頁
- (14) 瀬田貞二『絵本論』福音館書店 1985年 368～369頁
- (15) マーガレット・ワイズブラウン『クリスマス・イブ』ベニ・モントレソール絵 矢川澄子訳 ほるぷ出版、2003年
- (16) 脇明子『読む力は生きる力』岩波書店、2005年、79頁
- (17) 「子どもの館」福音館書店、1979年、12月号、瀬田貞二追悼号、9～10頁
- (18) 「子どもの館」福音館書店、1979年、12月号、瀬田貞二追悼号、15頁
- (19) 『児童百科事典』第1巻 平凡社、1951年、まえがき
- (20) 瀬田貞二『落穂ひろい』福音館書店、1982年、「はじめに」より
- (21) 斎藤惇夫『子どもと子どもの本に捧げた生涯』キッズメイト、2002年、182～185頁。『新選日本児童文学3 現代編』小峰書店、1959年、解説抜粋